工業高校における教員間の連携を促進する取り組み

－ チーム援助を活用して　-

学籍番号 169957　　阿津坂　理沙
大学院主指導教員　家近　早苗教授

１．問題と目的

近年，社会や経済の変化に伴い，子どもや家庭，地域社会も変容し，生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が複雑化・多様化している。このような中，「チームとしての学校」を作り上げていくことが非常に強調されている。しかし，報告者が勤務するような工業高校の組織的な特徴として，普通科高校よりも連携が取りにくく，担任が問題を抱え込む傾向がある。そこで，生徒たちが適切な援助を受けられるようにするためには，何が必要なのか，本研究では検討する。また，学校の中にある援助組織や資源の活用について検討する。

本研究の目的を①学級担任だけでなく，複数の教員で生徒へ援助を行う，②縦のつながりが強い工業高校で横の学年の連携を強める，③さらに学年だけでなく，学校全体に広める，の３点とした。

２．研究方法

・研究Ⅰ　課題のある生徒への個別のチームづくり

【目的】学級担任である報告者を中心とした課題のある生徒への少人数のチームを形成し，そのプロセスについて検討する。

【方法】報告者の実習校における観察を元に記述する。課題のある生徒への個別の援助チームを立ち上げ，その経過について記述する。

【結果・考察】これまで学級担任１人で対応していた問題を，校内の援助資源である協力してくれそうな教員として，学年主任や特別支援コーディネーターとともに，意図的に個別の援助チームを形成し解決にあたった。個別の生徒へのチームを形成することでよりよい援助サービスの提供ができたものの，他のクラスの問題状況は解決されずにいた。そのため，報告者の学級だけでなく同じ学年の他のクラスへと，チームで援助する体制をさらに広める必要がある。また，個別の援助チームは問題が解決すると解消されてしまうが，教員間の連携を生み出すためには，恒常的にチームで生徒を援助する体制をつくる必要があると考えられる。

・研究Ⅱ　学年会の実践，学年会モデルの検討

【目的】報告者が学年主任に働きかけ，学年会を立ち上げ，実践する。また学年会が，どのような要因があるのかを明確にする。

【方法】学年会の立ち上げについての実践を記述し，検討する。学年会に参加した教師5名の発話を逐語記録し，意味内容に従い分類し検討し，学年会のモデルについて提示する。

【結果・考察】校内に横のつながりを強める学年会の機能には，①相談への抵抗の減少，②話し合いや相談することへの受け入れ ，③話し合うことの提案や生徒の情報の共有，④作業の効率がよくなる，⑤教師の不安を支える，⑥主任の意向の周知，⑦教師がお互いにねぎらうこと，があることが理解できた。学年の教員同士だけでなく，さらに学校全体の教員の連携を生み出し，生徒に適切な援助サービスを行う必要がある。

・研究Ⅲ　教科担当者会議の実施，進路指導委員会の実施，校内の変化

【目的】学年の教員同士だけではなく，さらに学校全体の教員の連携を生み出すため。新たな組織である教科担当者会議，進路指導委員会を立ち上げ，生徒の情報を共有する。また，校内の変化について検討する。

【方法】実習校の学級担任と教科担当者の教員が，会議を開催し，その内容を記述する。実習校の学年会に，実習校の進路指導課長にも参加してもらい，学年会および進路指導委員会を実施し，その内容を記述する。また，校内の変化について報告者の観察，学年主任から聞き取りした内容を記述する。

【結果・考察】教科担当者が，生徒の情報を把握できていることで，授業の工夫をすべての生徒のための一次的援助サービスとして日常的に行うようになった。進路指導委員会の実施により，進路指導課という進路指導の専門性が高い分掌と学級担任が連携することで，教員同士の連携が促進され，生徒への適切な援助サービスへとつなげることができたと考えられる。また，校内の変化には，学年主任の校内における座席配置，他の学年への影響，学校全体の教員が連携し，生徒の問題状況の解決に向けて意欲的に教員が取り組んでいる，という学年主任の発言があった。

３．総合考察

本研究における，個別の援助チームの形成や，コーディネーション委員会（家近，2003）にあたる学年会といった，工業高校における教員間の連携を促進する援助システムの活用は，文部科学省（2015）が提唱する「チーム学校」の①「専門性に基づくチーム体制の構築」，②「学校のマネジメント機能の強化」③「教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備」に貢献できる可能性がある。

また，工業高校のようなセクト主義の学校で，教員が連携するためにはチームを使うことが非常に効果的であると考えられる。

学級担任一人での生徒への援助から個別の援助チームの形成のためには，学級担任に対して協力してくれそうな教員を発見し活用すること，個別の援助チームから学年会へと広がりを持たせるためには，学年主任や補佐する教員など，キーパーソンとなりコーディネートできる教員を発見し活用すること，学年会から学校組織へと広がりを持たせるためには，進路指導課長や学年主任のような主要な教員といった，それぞれのチームをつなぐ教員が必要であることが明らかになった（図１）。

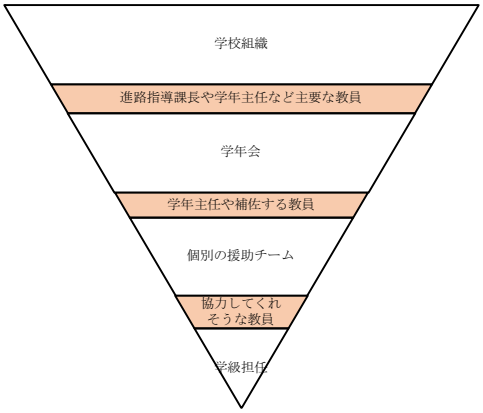

図１　学級担任から学校組織への教員間の連携とそれをつなぐ教員のモデル